

「夏空」の想像力を生きようとするとする人

松尾静子詩集『夏空』に寄せて

鈴木 比佐雄

1

松尾静子さんは一九四八年に長崎県諫早に生まれ、今もその地で暮らしている詩人だ。また民話的な小説を書き、絵画も描いてきた表現者でもある。詩集は私家版の小冊子を出したことにはあったが、本格的な詩集は今回が初めてだ。二〇一二年の夏の終わり頃に詩集の相談があり、初めてまとめて原稿を読んだ時には、特に詩「夏空」の青の色彩が強烈で、心が青に染まってしまうような不思議な青のエネルギ―を感じたのだった。序詩「四月」の初めの二行「かなしみは そらのいろ／よるこびは うすもいろの さくらいろ」に表現されているように空の色が悲しみであるのなら、夏空は最も深い悲しみを秘めた色なのだろう。諫早の詩人といえば誰もが詩集『わがひとに与ふる哀歌』を書いた伊東静雄を想起するだろう。その伊東静雄と親交があり詩集の序文を書いてもらった上村肇が主宰していた諫早の詩誌「河」に松尾さんは参加していた。そのような詩的な土壌から伊東静雄の自然や世界の存在を根源的に問うていくとする姿勢も学んでいたに違いない。

詩集『夏空』は一章「夏空」十六篇、二章「少年」九篇、三章「青い鳥」十七篇の計四十二篇から成り立っている。

一章「夏空」の詩篇は、父母との思い出、長崎原爆、

一九五七年七月下旬に起こった諫早大水害などを想起し、それらの記憶を後世に残したいという激しい思いを感じることが出来た。特に長崎原爆に触れた一章冒頭の「木洩れ日」「リユウの目」は長崎原爆の悲劇を内面に抱えている人しか書けない二篇だろう。その後の諫早での父母たち家族との暮らしや故郷の風景を書いた詩篇には新鮮な読後感がある。また伊東静雄も愛した本明川が氾濫し六〇〇人もの人びとが流され亡くなった諫早大水害に関わる詩「書を書く女」「写真展（諫早水害）」には、諫早で生き死にした人びとへの鎮魂の思いが秘められていて心に刻まれる。詩「夏空」を引用してみる。

夏空

ねえお父さん／もつと青かったよね／青く深い空が／どこまでも広がって／真つ白な入道雲が／山際から／湧き上がり／輝いていたよね／リボンが／一人ひとり違う／麦藁帽子を被り／手を繋いで／海水浴へ／行つたよね／悲しみを／なぞることはもうしない／見失ってきたものを／問うことも／／夏の青空が／あなたにもきつと

父と見上げた戦後まもない頃の青空から呼ばれているような詩だ。諫早市は島原半島の付け根に位置し長崎市から十数kmであり、長崎原爆の被爆者たちが多数避難してきた。私は二〇一一年八月九日に長崎原爆の実相が記されている『山田かん全詩集』を編集・発行した。山田かんさんは長崎駅近くの自

宅で被爆したが、翌日に爆心地を横切つて母たちが疎開していた諫早に向かつて歩いて行つた。その時の目撃した原爆直下の光景が後の山田かんさんの膨大な詩篇の中に繰り返しフラッシュバックのように立ち現れてきたのだつた。松尾さんは父母や故郷の人びとからきつと長崎原爆の悲劇を繰り返し聞かされたのだろう。そのような松尾さんの詩篇の特長は、松尾さんの記憶でありながらも、父母の朝鮮半島に関わる来歴や長崎・諫早の人びとの記憶につながつていゝる広がりを感じさせてくれる。その悲しみの記憶に松尾さんは、寄り添いながらも、何かこの世に生きることの驚きを感じ始めて、その記憶を生きる意志へと転換させようと試みてきたのだろう。「悲しみを／なぞることはもうしない／見失つてきたものを／問うことも」とは、安っぽい悲しみに浸つていゝるのではなく、本当の悲しみの記憶である家族・郷土の記憶を決して忘却しないことなのだ。そして無名の人びとが平和で暮らしていけるような「夏の青空」が世界中の「あなたにもきつと」届くように願つていゝるのだろう。松尾さんはこの詩のよつて父や家族へのこだわりを抱えながらも、多くの他者の頭上に広がる「青空」の想像力を抱き始めたのだろう。

2

第二章「少年」九篇は、少年、息子、青年という不可解な存在を見つめて、どこか謎解きをしようとするが、より謎が深まるようなミステリアスな魅力を感じさせてくれる。これらの詩篇の背景には、子離れしていく母の悲しみが通奏低音のように流

れている。そんな母親の子供へ執着がいつしか子供の固有の人生を肯定していく複雑な心境として描かれている。詩「息子」を引用する。

息子へ

魂が／空を駆け／自由に行けるものなら／あなたのもとへ行くだろう／ただ　ただ　あなたを抱きしめて／はらはら　涙を落とすだろう／／いとしいおまえに／語る言葉は見つかりません／／母が愛していたのだと／しみ　じみ　思えるその日まで／季節は幾つも過ぎるだろう／過ぎる季節の光の中に／母がきつといるのだと／あなたが思える／その日まで

この詩には子を産んだ母の過剰な愛が、いつしか子に寄せる無償の愛へ転換し、その思いが多く々の時間を経て子へと伝わつていく願いが込められている。

また詩「潮干狩り」は干潟にいて潮干狩りをしていゝると、いつしか青空の奥深くに連れて行かれるような奇妙な感覚を抱いてしまう詩だ。このような地上と天上を一気に繋いでしまう感受性は、伊東静雄の感受性を生み出した諫早の詩人たちの特長なのかも知れない。詩「潮干狩り」を引用してみる。

潮干狩り

皆ががんで浜辺を掘っている／地球のほんの小さな一角に
／こんなにたくさんの方が／集まって地面を掘っている／
／恐ろしかった／バスの窓から見る空は／明るく輝き／
海はのっぺり／広がっていた／私はどこに行くところ
だったのだろう

最終行の問いは、人がこの世に存在することの意味を根源的に問うていく、存在論的な問いであるだろう。虚しさ、絶望、またこの世にあることの儚さや不可思議な思いを受け止めていなければこのような詩は書けないだろう。

3

三章「青い鳥」十七篇は、夏の青空の色を我がものとするために、スケッチブックを持って外に出て行き、世界の多様な色取りを描写したいと願っている詩篇だ。三章のタイトル詩「青い鳥」を引用してみる。

青い鳥

霧を抜けると／青空だった／／目の隅に青を残し／きりきり
りと尖りながら／旋回し海原へと落ちた／／水の中も青
だった／瑠璃色の深みの向こう／体中の気泡を一直線に搾
り出し／なお／きりきりと尖って／／私は青い鳥

今も長崎・諫早の空は、悲しみの色に染まっているが、逆に

松尾さんは自分という存在を悲しみの青色で染めることによつて、自らの表現を生きる意志を想起させる「青い鳥」にしていこうと願っている。「夏空」の想像力を駆使して書き記した詩集『夏空』こそが、松尾さんにとっての「青い鳥」なのだろう。そんな「夏空」に舞う「青い鳥」を多くの人びとに読んで欲しいと願っている。